



一歩踏み出す勇気で人との縁をつないでいく ずっと大切にしていきたい仲間たちとの絆

浅利 章太さん 高知ファイティングドッグス株式会社 Public Relations Officer

Shota Asari

大学時代に経験したメキシコでのボランティアが、国際協力への興味の始まり。

幼少期から続けてきた「野球」と「国際協力」が、日系社会青年ボランティア（現・日系社会青年海外協力隊）につながった。異郷の地・高知の独立リーグ球団で、人と人の縁を大切に紡いできた彼の可能性が、今まさに花開こうとしている。

幼少時代から馴染みのあった 海外と野球が導いてくれた道

「牛を飼う球団」。経営難に苦しむ野球球団が、ユニークな取り組みで球団を存亡の危機から救う、かつてない実話を基にした書籍の名前だ。「地方を舞台に、野球だけではない取り組みをしている。その目の付けどころに衝撃を受けました」と話す浅利章太さん。この本が、浅利さんの今へとつながる道の始まりだった。

野球の海外遠征や、実家がホストファミリーになるなどの国際色豊かな経験があった彼にとって、海外は身近な存在だった。大学時代に姉の影響で経験したメキシコでの海亀保護活動

や、所属したNPO法人でカンボジアの産業振興に携わったことが国際協力に興味を抱いたきっかけだ。出会った仲間たちと夢を語り合っているうちに、それが自分の中で徐々に具体化されていくのを感じた。「幼少期から続けてきた“野球”と“国際協力”、これらを掛け合わせて自分にできることはないだろうか」。そう思いたどり着いたのが、JICAの日系社会青年海外協力隊だった。

空回りした理想像を 打破した先にあった感動と、 仲間たちの優勝

派遣されたのは、南米・アルゼンチンの日系移住地、ラ・プラタマ市にある日本人会の野球部。小学生や中高生を



対象に野球指導を行った。「最初の半年間は、語学力の問題、そして自身の理想像が先走ってしまい、子どもたちとすれ違いの日が続きました」。そこで、指導者という壁を取り払い、積極的に彼らの輪の中に入り、プライベートの時間を共に過ごすことに意識を傾けてみた。すると、そこで初めて彼ら一人ひとりの個性に気付くことができた。それぞれに合った接し方や指導は違う。そう



球団が運営するイベントで総合受付を担当する。何事にも真面目で真摯に取り組む姿勢が印象的。



イベントで使用する準備物の打ち合わせ。様々な場面で持ち前のリーダーシップを発揮している。



事務所でのデスクワーク。県のトップアスリート養成事業の調整を日々行っている。

考え行動に移していくうちに、いつの間にか彼らに受け入れられるようになっていた。「不思議とそこから、自分が重きを置いて伝えてきた“道具やグラウンドを大切にすること”というのを自発的に行ってくれるようになったんです。その姿を見た時は感動しました」。

努力が実り、準優勝止まりだったU18のチームが、春と秋に開催される州のリーグ戦で優勝を飾った。派遣終了3ヶ月前、最高のプレゼントだった。

日系社会への恩返しをする場を求め家族と共に高知移住

派遣後に思い描いていた進路は、スポーツビジネスに携わる仕事。文献やインターネットを調べる中で出会ったのが、「牛を飼う球団」の書籍だった。その本に描かれていたのは、「高知ファイティングドッグス」。野球文化が根付く高知県の、小さな独立リーグ球団だ。米作りや生姜栽培など、様々な面白い取り組みを行っている地域に根差したスポーツチームとその運営者の存在に、強烈な印象を抱いた。

帰国後、球団が南米日系社会の野球指導者を対象としたJICA日系研修を開始することを耳にした。アルゼンチンで共に汗を流したカウンターパートを紹介したい一心で、当時副社長だった北古味潤氏にSNSでコンタクトを取り、翌月高知へ飛んだ。

それ以降高知には、現地球団の見学や、研修員として来日したカウンターパートに再会する目的で何度も訪れた。次第に日系研修や県のスポーツイベントの講師を任されるようになり、高知や北古味氏との縁が深まっていった。その中で、北古味氏の生き様や仕事に対する姿勢に感銘を受けている自分に気付いた。当時読売ジャイアンツのアカデミーコーチとして野球指導をしていたが、高知が日系社会と縁深い土地柄だったことも手伝って、「この地が日系社会へ恩返しできる場だ」と思い、家族と共に高知への移住を決断。高知ファイティングドッグスで球団職員としての奮闘が始まった。

現在は、高知県スポーツ推進計画の施策のひとつである事業運営をメインに、スポーツ団体の間を日々多方面に

浅利 章太さん プロフィール

千葉県出身。日本大学国際関係学部卒業後、民間企業を経てNPO法人に所属し、カンボジアでボランティア活動に従事。2015年6月に日系社会青年海外協力隊としてアルゼンチンに派遣後、読売ジャイアンツが運営する野球スクールでの指導経験を経て、現在プロ野球独立リーグ・四国アイランドリーグ plus所属「高知ファイティングドッグス」のPublic Relations Officer。

駆け回っている。「課題は、スポーツ界特有の縦割り文化により、それぞれの競技団体がうまく連携を取れていないということ。少子化が進む中で、スポーツ環境の拡大や、中山間地域でのスポーツに触れる機会の創出など、あらゆる架け橋になれば」。日系研修のプログラムの構成にも、ボランティア時代の経験が生かされている。目標は、「高知のスポーツと言えば浅利」と認識されるようになること。「自身が動かないと何も生まれない。アルゼンチンや高知で育んだ人との縁やつながりを大切に、何事にも一歩踏み出す勇気を持ち続けていきたいです」。そう話す浅利さんの爽やかな笑顔がまぶしかった。

浅利さんへのエール!

高知ファイティングドッグス株式会社
代表取締役
北古味 潤 さん



これまでの経験を血肉にして次の世代にバトンを

浅利さんは、相手の気持ちを感じながらも常に広い視野を持ち、自分の可能性を模索できる人。現在メインで活動している県のトップアスリート養成事業の業務は、多岐にわたる競技スポーツ関係者との連携が重要、かつ県や教育委員会との調整が必要なため、彼のように周囲との協調性、信頼や実直さがないと務まらない仕事です。ボランティアを通して培った経験や人脈は、彼の血となり肉となる宝物。その時の恩やご縁を忘れずに、次の世代に繋げていってくれることを期待しています。